様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：２３５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2017
課題番号：２４５２０１６５

研究課題名（和文）明治期・大正期・昭和期に国内外で活動した彫師に関する実証的研究

研究課題名（英文）An Evidence-Based Study of Japanese Tattooists in the 19th and 20th Centuries

研究代表者
山本　芳美（YAMAMOTO, YOSHIMI）

都留文科大学・文学部・教授

研究者番号：５０３６３８８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,100,000円

研究成果の概要（和文）：本課題では、19世紀末から20世紀初頭に、欧米や東南アジアに出稼ぎや移民した者を含めた日本人彫師の活動を研究した。各地の研究機関、大学、図書館、博物館などで、新聞や雑誌、古写真、公文書のデータベースや所蔵資料を調べ、香港、シンガポール、フィリピン、タイ、インド、イギリス、アメリカ、カナダで複数の日本人彫師が活動したことを解明した。本研究により、英米に渡った彫師Yoshisuke Horitoyo、香港の野間傳の足跡が判明した。また、船で渡航した当時、客を彫師のもとに効率よく送りこむ、ホテル、古美術商、写真師、彫師間のネットワークが横浜、神戸、長崎に形成されていた可能性も明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This research examines the activities of Japanese tattooists, including those who travelled to Europe, the Americas, Southeast Asia, and elsewhere to work or as immigrants, at the end of the 19th century and beginning of the 20th. Using newspapers, magazines, photos, databases, and archives at research institutions, universities, libraries, and museums, this research makes clear that many Japanese tattooists lived and worked in China, Hong Kong, Singapore, the Philippines, Thailand, India, Britain, the United States, and Canada. This research also finds new evidence of the lives and work of tattooists Yoshisuke Horitoyo, who worked in Britain and the United States, and Noma Den, who worked in Hong Kong. It also reveals that networks may have formed in Yokohama, Kobe, and Nagasaki among hotels, curios, photographers, and tattooists to efficiently route potential customers, who traveled by sea, to tattooists.

研究分野：文化人類学

キーワード：ｲﾚｽﾞﾐ　彫師　タトゥー　移民　出稼ぎ　刺青　香港　欧米

１．研究開始当初の背景

報告者は、1990 年代初頭より日本や台湾などでのイレズミの歴史人類学的研究に従事してきた。その過程で、19 世紀半ばで日本人の彫師のなかに仕事を海外でするほか、外国人旅行客相手に仕事をした者がいることに気づいた。19 世紀中ごろから英字新聞の記事などに、国外に移住した彫師や日本でのイレズミ施術経験が言及されている。

1872（明治 5）年から 1948（昭和 23）年にかけて、日本では彫師をすることも客となることも法的に規制されていたが、彫師たちの移動や移住、客層の変化は、規制を避けたために生じた現象の可能性がある。2000 年代に入ると、19 世紀半ばからイレズミを日本土産とする旅行者や軍人などの滞在者により具体的に着目する研究が現れるようになった（Guth2004、小山 2010 ほか）。

本研究は、この流れを受けてのものとなる。移民研究や「日本人の南洋関与」研究では、19 世紀中ごろから 20 世紀にかけて、海外に渡った日本人がさまざまな職に就き、活動していたことを明らかにしてきた。たとえば、日本人写真師に関しては、東南アジアや満州各地における先行研究があり、「からゆきさん」についても一定の蓄積がある。特に、東南アジアで仕事をした彫師についてはこれまで注目されたことがなかったため、新たな研究の地平を切り開く可能性があった。

２．研究の目的

本研究では、国内外で活動したイレズミの彫師に関しての基礎研究を目指した。本研究は、国内外で活動した日本人彫師の動向を明かすことにある。日本人彫師の海外流出は、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて英国と米国においてイレズミが大流行したことも背景にある。このため、本研究では日本国内に留まらず、世界各地にある文献・資料研究を通して、明治から昭和にかけて彫師たちの足跡をとらえることを目的とした。この研究は当時の彫師業が、写真師のように越境性の技術職であった可能性を探る意味がある。また、「日本人会」などの邦人組織の枠外にいた人々の活動を明らかにする試みでもある。

３．研究の方法

本研究では、19 世紀半ばから 20 世紀前半の英語圏と東南アジアを対象とし、データベースで得られた資料を中心に整理することで、日本人彫師の移動とその経路、拠点を把握することを目指した。歴史研究の方法論からすれば、地域を絞り、その地域に関する資料を深く網羅的に渉猟するべきであろうが、本研究では約 100 年前の東南アジア各地と欧米の活動状況を俯瞰することを優先した。

文化人類学ないし民族学的な論文や研究報告は多数あるが、街中で彫られているイレズミ・タトゥーについては、新聞・雑誌・書籍の「ゴシップ記事」からその実像を探っていく必要がある。このため、次のような方法をとった。

１）邦文、英文文献・収蔵品の収集と分析

日本や海外で編まれた新聞や雑誌、古写真のデータベースを、日本や台湾、イギリス、アメリカの図書館で検索し、関連資料を収集した。外務省の在外邦人統計も参考にしながら、新聞広告や古写真、下絵など各種資料を調査した。

２）海外資料調査

香港、シンガポール、台湾（台北）、アメリカ（ロスアンゼルス、ニューヨーク）、カナダ（トロント）、イギリス（ケンブリッジ、オックスフォード）、フランス（パリ）、オーストリア（ウィーン）、オーストラリア（シドニー）にて、地域研究資料のコレクションやデータベースをもつ大学図書館、公文書館、公共図書館、博物館などで資料調査をおこなった。当時の彫師が仕事場にしていた場所の現況を確認し、その上でどのような場所に店を構えたのかを知るため、当時の地図を含め、地勢的な情報を集めた。

３）海外の特別展・コンベンションの調査

海外におけるイレズミの歴史とその資料や、大衆芸術としてのイレズミの表象を理解するため、各地の特別展やコンベンションを見学した。また、展示がいかに見学者に受け止められているかについて主催者やキュレーターに話を聞いた。見学の際には、現地資料の調査も同時に実施した。

2014 年 5 月のフランスのケ・ブランリ美術館「Tatoueurs,Tatoues」展、2014 年 3 月にロスアンゼルスの全米日系人博物館「Perseverance」展、イギリスのタトゥー史を回顧するコーンウェルの国立海事博物館で 2017 年に催された「Tattoo ：British Tattoo Art Revealed」展、タトゥーをした皮膚のコレクションも有する Wellcome Collection を見学した。2017 年 5 月には北京近郊の廊坊のコンベンションも見学した。

特に「Tatoueurs,Tatoues」展は、巡回する先で新たな現地資料を加えた展示となっていたため、2016 年にカナダのトロント、2018 年 3 月にロスアンゼルスに巡回した「Tattoo」展をそれぞれ見学した。また、「Perseverance」展がシドニーに巡回したことに伴い、国際交流基金シドニー事務所から講演に招聘されたこともあり、同時期にシドニーで開催されたタトゥーコンベンションを見学した。

４．研究成果

本研究では、これまで明らかにされてきた資料を再調査するとともに、先行研究では空白であった東南アジアにも目を向けた。これから、外務省統計、中国、東南アジアと欧米、

日本国内にわけて成果を示す。

１）外務省の在外邦人統計に残る「彫師」の活動地

外務省の在外邦人統計「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B13080311400、海外在留本邦人職業別人口調査一件　第六巻(B-7-1-5-4_006)(外務省外交史料館)」によると、1907 年が、最も多く彫師が記録された年であり、各地の文身師（彫師）数は次のとおりであった。

芝罘の威海澎（中国山東省）　文身師 3 戸、男性 7 人、女性 15 人、計 12 人
ムンバイ市 写真業・文身業 戸数不明、男 4 名、女 2 名 計 6 名
カルカッタ市 文身師 男 2 名、計 2 名
ラングーン市 文身師 1 戸 男 2 名
香港 文身業 7 戸 男 35 人、女 11 人、計 46 人
マニラ市 文身師 4 戸、男 10 人、女 1 人、計 11 人
カビテ市 文身業 1 戸 男 1 人、計 1 人
オロンガポ市 文身師 2 戸、男 2 名 計 2 名
シンガポール 文身師 3 戸、男 3 人 女 4 人、計 7 人

この統計を受けて、各種地域資料やデータベースが整っている香港とシンガポールを中心に現地資料を調べた。香港、シンガポールの現地の新聞広告や記事、現地在住法人がまとめた年鑑、商工録、外務省の在外邦人統計などを調査した。

２）香港

香港では、日本人彫師が彫師業をほぼ独占しており、そのうち最も成功していた野間傳三郎について明らかにした。野間が英字新聞に出した広告各種のほか、出身地、仕事の変遷、香港日本人社会の中での位置づけ、仕事場の住所ならびに写真、没年や墓、娘の存在が判明した。

長崎県浦上出身の野間は「D. Noma」ないし野間傳と名乗り、1894 年前後から香港で開業し 1909 年に当地で死去した。ちなみに、当時、英字新聞に日本人の個人商店で広告を出していたのは、彫師の野間傳三郎だけであり、Queens Road 60 番地という店の住所から、日本人社会のなかでも成功した人物であったことが判明した。野間は新聞広告を活用し、例えば 1906 年には、「Prince of Wales、Duke of York 公 、ニコライ二世 御用達であり、独自に調合したインクで色鮮やかに美しく仕上がる。店は朝 9 時から営業し、年中無休である。32 年の経験があり、適正価格で、3,700 名の礼状をいただいている」と宣伝していた。香港歴史博物館には、羽を広げたクジャクの絵の下に“D.NOMA PROFESSIONAL TATTOOER”と書かれた旗を店の 2 階からつりさげた街頭の写真が所蔵されていた。

奥田乙治郎 1937『明治初年に於ける香港日本人』によれば、1901（明治 34）年の段階で、香港在住の邦人男性が 197 名、女性が 224 名おり、うち 4 名の男性が彫師であった。野間のほかに尾台良卿、河原畑力松、生田幸吉が、香港に来る軍人や旅客を客としていたという（山本 2017）。

３）シンガポール

国立シンガポール図書館新聞データベース Newspaper SG から、1889 年から 1929 年にかけて少なくとも 12 名の日本人彫師が断続的に英字新聞に広告を掲載していることが判明した。新聞広告から判断する限り、当時のシンガポールでは日本人が彫師業を独占していた。なかには、香港の野間の弟子であることを自称する彫師もいた。

４）東南アジア

フィリピンが 5 名、タイ 1 名、インドの各地に複数の日本人彫師がいたことが判明した。インドに関しては、1 名が英字新聞に広告を出していた。ボンベイでは当局の目を憚って、遊郭を経営しながら、表商売として「入墨師」を経営した人々がいたことが触れられている（宮岡 1968:179）。1920 年頃には、インドを旅回りで商売をした日本人彫師も現われた（佐野 1920）。

５）イギリス・アメリカ・カナダ

20 世紀半ばまでに欧米で出版されたイレズミの歴史についての書籍と新聞記事、新聞広告のなかから、イギリスにいた Yoshisuke Horitoyo 、Horicho 、アメリカにいた Mituhashi、Hiroshima、N. Kakegawa 、George Yoshino 、George Takayma（新聞記事の記述のまま）がいたことがわかった。また、カナダ北西の街、ヴィクトリアとヴァンクーバーにも各 1 名の日本人彫師がいた。彫師か否かは不明だが、1892 年にリヴァプールに「ホリ、ノブ」という店を経営している男性もいた（「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B13080306300 、海外在留本邦人職業別人口調査一件 第二巻(B-7-1-5-4_002)(外務省外交史料館)」）。

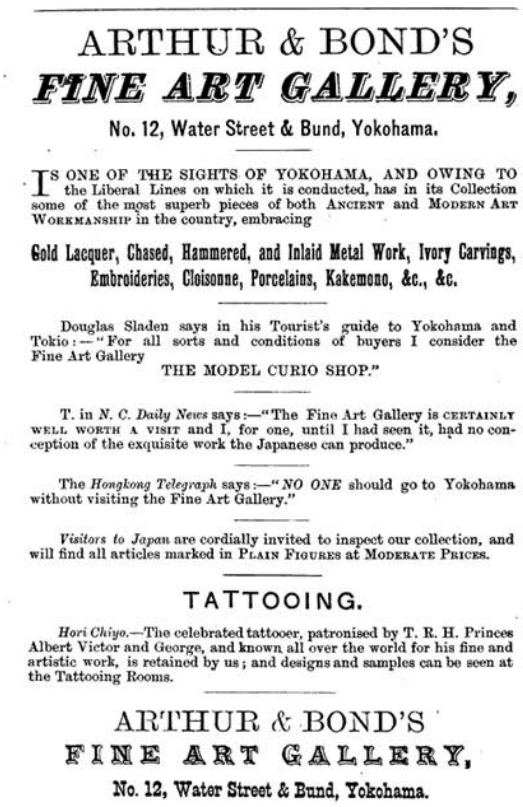
今回の研究では、小山騰（2010）が発掘した Yoshisuke Horitoyo または Y.K. Horitoyo と名乗った彫師について、さらに明らかにすることができた。Horitoyo は、19 世紀末に英国に渡り、さらに米国で活躍したが、各種データベースが充実したことにより、関係する新聞記事や広告などを新たに発見した。

新聞広告や記事を整理すると、Y . K. Horitoyo の名は、1896 年から英国で現れ始める。この人物は、雅号である Horitoyo につけられている頭文字 Y.K. から、リヴァプールで 21 歳の女性 Anne Ashton と結婚した工藤義祐の可能性が高い。（ 小山 1995 ： 234-235 ） 。1897 年には Horitoyo はロンドンにおり、最初はホワイトチャペルで仕事

をしたが、やがてロンドンの彫師であるトム・ライレー（Tom Riley）の助手をつとめ、1898 年 12 月末にはニューヨークに渡っている。1899 年 3 月にニューヨーク最大手のオリエンタルストアである A. A. Vantine & Co.の 4 階で数週間仕事をし、同年 11 月 16 日には、ブルックリンの海軍工廠（Navy Yard）そばの Sands Street 233 番地に移ったと広告している。その後は、 1900 年にサンフランシスコに移り、Horitoyo の名を織り込んだざれ歌が Los Angeles Times の 12 月 23 日記事となったことに見るように有名な彫師となった。だが、1900 年以降の新聞記事には、これまで名乗ってきた Y. K. Horitoyo ないし Yoshisuke Horitoyo ではないため、名を騙った別の彫師の可能性がある。Horitoyo の 1902 年以降の足取りは不明である。

６）日本

英米の英字新聞データベースでは、1860 年代から日本のイレズミ見聞記や体験記が現れはじめる。日本では横浜、神戸、長崎などの国際港に彫師が集まっており、外国人旅客や軍人を相手に仕事をしていた。横浜と神戸で美術商を営む英国系商社 Arthur & Bond は、彫千代が店で営業していることを外国人旅行者向け日本旅行ガイドブックである John Murray 社の A Handbook for Travellers in Japan.の 1891 年版で広告した。


ARTHUR & BOND'S
FINE ART GALLERY,
No. 12, Water Street & Bund, Yokohama.

IS ONE OF THE SIGHTS OF YOKOHAMA, AND OWING TO the Liberal Lines on which it is conducted, has in its Collection some of the most superb pieces of both ANCIENT and MODERN ART WORKMANSHIP in the country, embracing

Gold Lacquer, Chased, Hammered, and Inlaid Metal Work, Ivory Carvings, Embroideries, Cloisonne, Porcelains, Kakemono, &c., &c.

Douglas Sladen says in his Tourist's guide to Yokohama and Tokio:—"For all sorts and conditions of buyers I consider the Fine Art Gallery
THE MODEL CURIO SHOP."

T. in *N. C. Daily News* says:—"The Fine Art Gallery is CERTAINLY WELL WORTH A VISIT and I, for one, until I had seen it, had no conception of the exquisite work the Japanese can produce."

The *Hongkong Telegraph* says:—"*NO ONE* should go to Yokohama without visiting the Fine Art Gallery."

Visitors to Japan are cordially invited to inspect our collection, and will find all articles marked in PLAIN FIGURES at MODERATE PRICES.

TATTOOING.

Hori Chiyo.—The celebrated tattooer, patronised by T. R. H. Princes Albert Victor and George, and known all over the world for his fine and artistic work, is retained by us; and designs and samples can be seen at the Tattooing Rooms.

ARTHUR & BOND'S
FINE ART GALLERY,
No. 12, Water Street & Bund, Yokohama.

資料を総合すると、日本では客となることへの規制は外国人旅行者には及ばず、各港にイレズミを所望する旅客が到着すると、ホテルや美術商、写真師、ガイドが彫師を世話し、時には彫師自身がホテルの宿泊客に売り込みに行っていた実態が浮かび上がってきた。

７）まとめ

そもそも、当時の彫師たちは各地を転々として仕事する傾向があったため、実像がつかみにくい人々である。東南アジア各地では、日本会や領事館などが設立される以前にすでに「一匹狼」として仕事をしていたことがうかがえる。だが、大企業が進出して支店を置き、各種邦人団体が発達するにつれ、それまで中心にいた「無頼の人々」の存在が霞むようになっていった。こうした時期に実施された外務省の統計は、当時、日本領事館が置かれた地点での調査である。調査委託者が把握していた限りの「実情」が報告されていた時期も、網羅的な統計ではなかった可能性がある。1909 年以降は、調査票の書式が整えられたことにより、むしろ彫師の動静はつかめなくなる。しかし、それまでの結果からでも、東南アジア一帯に日本人彫師の拠点が広がり、香港では計 46 名にのぼっていたことがつかめた。

英文新聞や雑誌では、1860 年代から日本人彫師の記事が増え始める。1860 年代から 1880 年代は、外国人旅行者による日本の彫師訪問記が中心である。1890 年代から 1900 年代に海外に渡った日本人彫師のインタビュー記事と広告が最も多くなるが、1920 年代には日本人彫師に関する広告や新聞記事はほぼみえなくなる。この減少は、日本人彫師の存在が珍しくなくなったか、各地の対日感情を反映した可能性がある。

今後も、本研究を続け、各地の資料をより網羅的に集めたい。本研究期間では、彫師が遺した下絵帳や手記、写真などはほとんど掘り起こせなかった。

およそ 100 年以上前のことであるため、関係者や資料に心当たりがある方は、報告者までご一報いただければ幸いである。

末筆となったが、今回の研究成果は、科研費の助成を得たうえ、多くの方や機関から協力を得られたことで結実した。紙幅のため、名前を挙げられないのが残念であるが、深く感謝するものである。

参考文献

① Christine Guth 、2004 、Longfellow's Tattoos: Tourism, Collecting, and Japan.”、University of Washington Press.
②小山 騰、1995、『国際結婚第一号―明治人たちの雑婚事始』、講談社
③小山 騰、2010、『日本の刺青と英国王室〔明治期から第一次世界大戦まで〕』、藤原書店
④宮岡 謙二、1968、『娼婦―海外流浪記』、三一書房
⑤佐野 甚之助、1920、『印度人の文身の話』、同人発行所、46:11-13
⑥山本 芳美、2005、『イレズミの世界』、河

出書房新社

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①山本 芳美、2017a、「香港の日本人彫師たち――19 世紀末から 20 世紀初頭まで」、『政經論叢』第 85 巻第 3･4 号、179-216 、明治大学政治経済学部

〔学会発表〕（計３件）
①山本 芳美、2017b、「卑南族的身體裝飾――手紋和「黑齒」」、第三屆「卑南學」學術研討會（第 3 回「プユマ学」学術シンポジウム）、発表日：2017 年 11 月 4 日（於：台湾・台東・国立史前文化博物館）
②山本 芳美、2017a、「日本みやげとしてのイレズミ――19 世紀からの動態」、日本民俗学会第 69 回年会、発表日:2017 年 10 月 15 日 （於：佛教大学紫野キャンパス）
③山本 芳美、2016、「台湾原住民族刺青的記憶與文化傳承」、『世界少數民族文化傳承暨教學創新』國際研討會（於：台湾・花蓮・慈濟科技大學・）

〔図書〕（計３件）
①山本 芳美、平凡社、2016、『イレズミと日本人』、221
②Yoshimi Yamamoto Actes Sud & Musee du Quai Branly, 2014 From early times to the Tattoo Boom during the Edo period. Tattoo, Paris, France pp.88-95（仏語版もあり）
③山本 芳美、柏書房、2012、「「台湾原住民族」と「日本人」のイレズミとその記憶――イレズミへの賞賛と規制をめぐって」都留文科大学比較文化学科編『せめぎあう記憶――歴史の再構築をめぐる比較文化論』、pp.247-285

〔その他〕
①山本 芳美、2014、「台湾原住民族とそのイレズミ」DVD「南島残照――台湾原住民族のイレズミ」ヴィジュアルフォークロア付属解説書、15（DVD 字幕も監修）
②山本 芳美、2016、「日本の彫師はいつから認められてきたのか」、『SYNODOS 』https://synodos.jp/culture/17323/2
③業績の詳細は、都留文科大学/ 教員業績照会を参照してほしい。
https://ptweb.tsuru.ac.jp/step/KInfo.asp?ID=123

６．研究組織
(1)研究代表者
山本 芳美（YAMAMOTO, Yoshimi）
都留文科大学・文学部・教授
研究者番号： 50363883